

「自分もみんなも 明るく うれしく よかったね」を具現する子どもの育成 ～新聞を活用した、当事者意識を育む同和教育関連授業の充実と、

日々の教育実践の積み重ねを通して～

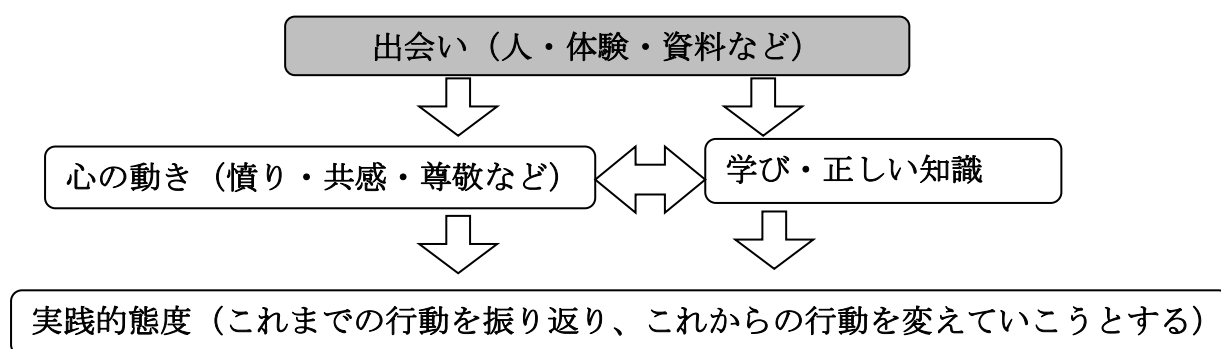
妙高市立新井中央小学校

1 学校の概要

平成8・9年に当時の文部省指定を受けて以来、人権教育、同和教育の研究に取り組んできた。この時から「自分もみんなも 明るく うれしく よかったね」の合言葉のもと、様々な差別などの問題を自分のこととして受け止め、考え、かかわろうとする心（当事者意識）を育てることを大切にしてきた。また、平成14年からは、6年生がゲストティーチャーと共に考える授業を実践・公開し、平成21年度からは、9月の学習参観日に全学級で同和教育関連授業（「なかま」の時間と呼んでいる）を公開し、学校の取組を発信してきた。平成23年度からは、人権教育、同和教育を研究のテーマにして校内研修に取り組み、自他を大切にしていこうとする子どもを育てる日々の教育活動を積み重ねるとともに、同和教育関連授業の充実を図ってきた。

「自分もみんなも 明るく うれしく よかったね」の合言葉を具現するため、研修を積み重ねてきた結果、人を傷付けるような言動は比較的少なく、あった時には誰かが気づき、適切な対応をすることができた。いじめや差別を見逃さない、許さない子どもたちに育ってきている。

当事者意識を育み、思いや決意を伝え合う「なかま」の時間を充実させるために、下図のような授業展開を基本としている。



2 N I E実践のねらい

(1) 研究の流れの特性より

児童は、人・体験・資料との出会いをきっかけに様々な差別問題について考え、自分のこれまでの行動を振り返り、これからの行動を変えていこうとする。新聞もそのきっかけの一つになるのではないかと考えた。一年次は、様々な活用の可能性を探るため、活用方

法とタイミングについては、限定せずに授業者に任せることとした。

(2) 新聞の特性より

新聞のよさは、下記のとおりである。特に、内容が事実であるという真実味があることと様子が鮮明に伝わる写真が掲載されている等の特性を活かし、社会の中で実際に起きている差別問題を教材化しようと考えた。

- ・一人一人が知りたい情報が載っている。(一覧性・俯瞰性)
 - ・繰り返し読むことができる。(記録性・詳報性)
 - ・同じ出来事でも伝え方に違いがある。(多様性)
 - ・文章を書く手本になる。(理論性)
- (NIEアドバイザー 川合紀子先生からいただいた資料より)

3 本年度実践の概要

(1) 職員研修

① 講師を招いての研修

昨年度のNIE実践校から講師をお招きし、研修の進め方や日々の新聞活用についてご講話いただいた。実践されていたNIEタイム（週1回、朝読書の時間を使った新聞を活用した学習）のトピックから幾つかご紹介いただき、職員で実際に体験することでNIEタイムの有効性を実感した。



② おもしろしんぶん館見学

職員研修で見学し、新聞の歴史とできあがるまでを短時間で理解することができた。関心をひく工夫が随所にあり、大人にも子どもにも非常に分かりやすくできている。後日、5年生も見学し、社会科の放送や新聞等の産業に関する内容の学習に役立った。



(2) 環境整備

各階に新聞閲覧スペースを設置した。担当職員が毎朝新聞を入れ替えた。すぐそばにバックナンバーを置き，児童が読みたい時に読めるようにした。低・中・高学年の各階に設置することで，発達段階に応じた新聞を用意でき，教室を一步出るとすぐ読めるという環境にした。



4 新聞を活用した授業づくり

(1) 気付きや視野の広がりをねらいとした活用（3年生「なかま」の時間）

① 主題名 高齢者とともに生きる

読み物 資料名 「おばあちゃんにはムリ？」（出典：あけぼの 一部改正）

新聞 資料名 「自分を磨き人生元気」（新潟日報 2019年9月16日）

② 学習のねらい

「おばあちゃんに海外旅行はムリよ。」と言われた「おばあちゃん」の気持ちを話し合うことを通して，老いていることへの差別的な言動に気付き，高齢者の気持ちに寄り添って考えながら話していこうとする気持ちを高める。

③ 読み物資料の要旨

祖母は，野菜作りが得意で，毎日のように畑に行って世話をしている。しかし，家族で海外旅行に出掛ける話が出た際，「おばあちゃんに海外旅行はムリよ。」と言われる。

④ 授業の展開

資料を読み，「ムリ」と言われた祖母の気持ちを想像したり，生き生きと活動する高齢者の記事を見たりすることで，どうすることが寄り添うことになるのか，話し合う。



⑤ 当事者意識を高めるために

- ・総合的な学習の時間での体験を振り返り，具体的なイメージをもたせる。

今までに訪問した施設でのインタビューや交流活動を振り返ることで，高齢者の生活の様子を想起させやすくするとともに，自分にとっても身近な存在であることを感じさせる。

- ・新聞記事を活用し，高齢者が生き生きと生活する様子を実感させる。

高齢者が健康で元気に過ごしている様子を記事で知ることによって，それぞれが自分

の思いを大切にしながら生き生きと生活していることを実感させる。また、写真や本人のコメントが掲載されていることで、それぞれの生き方や考え方にふれ、本人の希望を尊重することがその人の幸せにつながることを理解させる。

⑥ 授業での効果

- ・写真と見出しに注目させたり，キーワードにマーキングしたりする工夫により，自ら記事を読もうとする姿が多く見られた。
- ・板書の大きな写真→新聞→手元に配られた新聞で確認の流れが効果的だった。
- ・新聞記事提示のタイミングがよかった。
- ・近隣の話題であることが，「自分らしく生きているお年寄り」の現実味をアップさせた。
- ・体験と資料及び新聞記事をうまくつなげていた。
- ・年を重ねるとできないことが多くなっていく中で，プラスのイメージをもたせることができた。
- ・祖父母と同居している・していないをカバーできた。



(2) 1時間を通して中心資料として扱う活用（5年生「なかま」の時間）

- ① 主題名 相手を知ろう 理解しよう 新潟水俣病被害者に寄り添う
新聞 資料名「素顔～新潟水俣病被害者の暮らし～」(新潟日報 2019年7月8日)

② 学習のねらい

新潟水俣病被害者が受けている差別の現実を知り，被害者の思いに寄り添うことを通して，相手への不理解が差別を生み，人を生きづらくさせることに気付き，これから人とかかわる中で大切にしていきたいことを考え，実践しようとする意欲を高める。

③ 授業の展開

新聞記事により，新潟水俣病被害者は病気だけでなく，差別を受け，つらい思いをしていることを知る。「自分だったら，どんな気持ちになるか。」
「自分がそこにいたら，どうするか。」と考えさせたり，「何がこんなにつらい思いをさせているのか」と投げかけたりして，相手を理解することやかかわることが差別や偏見をなくすことに気付かせる。



④ 当事者意識を高めるために

- ・ 新潟水俣病は普通に生活している人に起こった病気であることを押さえる。

旧鹿瀬町の人々は、川からとれる魚を食べて普通に生活していた。いつのまにか水俣病に侵されていたという事実は、「もしかしたら自分も」という（他人事では済まされない）感覚を与える。

- ・ 新聞記事を活用し、新潟水俣病被害者が受けた差別の現実を直視する。

衝撃的な写真と次々と書き連ねられている差別の事実に向き合わせ、その人自身を知ろうとしないことや差別が人をどれだけ傷付けるか理解させる。当事者の写真が掲載されていることが、差別が実際にあるということを子どもたちに突き付けることになる。



⑤ 授業での効果

- ・ 昔のことではなく今もある差別事象として真実味をもって児童に捉えさせることができた。
- ・ 新聞記者が内容を精査した結果の記事であることから事実の重みが伝わってくる。
- ・ 分量、情報量、提示の仕方など、内容理解の手助けが必要な場合がある。

- ・ 画像資料の提示を2段階にすることで、子どもたちが対象に関心をもった。

（足元の見えない画像⇒しびれを和らげるためにハンマーで足をたたく画像）

- ・ 静止画像より動画の方が有効なこともある。画像の大小も然り。
- ・ 掲載日へ注目することにより「どうしてこの時期なのか」を考えさせられる。
- ・ 連載記事の活用することで、もっと多くの気付きや関連付けが期待できる。
- ・ 写真から新聞記事につなげる流れがいい。
- ・ 「資料を読み、キーワードを貼り出す」これまでの授業のパターンをNIEでも引き継げる。

5 成果と課題

(1) 成果

① 新聞の利用効果は多様である

写真や記事の内容、提示の仕方やタイミングによって、学習の動機付けにも成り得るし、ねらいに迫るための媒体にも成り得る。使い方次第で多様な効果がある。ただし、日頃から新聞を見る習慣を付け、使用目的にあった記事をストックしておく必要がある。

② 社会の中で実際に起きている差別問題を現実のものと捉えられる

多様な差別の歴史や過去の事象から自分の生き方を問い直しつつ、新聞で当事者の語りを目の当たりにすることで、見る者は、差別は今もあるという事実を突き付けられる。差別は遠い昔のことではなく、今も存在し、一刻も早く解決しなければならないと誰もが痛感する。

③ 新聞を効果的に活用する単元構成の工夫ができる

例えば、5年生では次のように構成できる。

ア ニジマス調理体験

生きた魚をさばいて調理し、食すまでを体験することで、他の生き物から命をもらって生きていることを実感する。

イ 事前学習 DVD

新潟水俣病がどうして起こったのか、どんな症状があるのかなど、基本的な内容をDVDで学習する。

ウ 新聞の活用①（本時）

写真や記事の内容から、新潟水俣病が原因で差別を受けた事実、分かりにくい病気のために理解が得られないこと等、差別の現実を知る。

エ 現地学習：環境と人間のふれあい館 語り部さんとの交流

直接会って交流することで、理解を深めたり、自分にできることを考える意欲を高めたりする。

オ 新聞の活用②

関連した記事を使って自分の生き方を振り返り、活用①とは違った視点（裁判に臨む思い、仲間と共に闘う姿勢等）でこれからの行動を考える。

※交流した語り部さんが、新潟日報の「素顔～新潟水俣病被害者の暮らし～」に登場されたので、今回はその連載記事を活用した。

(2) 課題

① 児童・職員にとって新聞を身近なものにする

4コマ漫画のせりふを考えたり、ふむふむのランキングを使ってビンゴをしたりする子どもたちは非常に楽しそうに見える。子どもが関心をもっていそうな記事に簡単なコメントを付けてホワイトボードに貼ると、立ち止まって読んだり、子ども同士がコミュニケーションしたりしている。職員の働き掛けしで、子どもたちは新聞に関心をもつ。2年目は、職員の更なる積極的な取組を促す必要がある。

② 年間を見通してどんな記事が必要か把握しておく

1年目の実践で、新聞が人権教育、同和教育に活用できることが分かった。効果的な活用を進めるため、年間を通してどんな記事があるとよいか、担当学年の要望を次の同学年担当に引き継ぐとよい。さらに、それを全職員で把握しておく、ほしい記事が入手しやすくなり、活用法も多様になる。